

都市公園利用形態に関する研究

九州産業大学 学生会員 ○吉留 寛之
九州産業大学 学生会員 伊藤 良浩
九州産業大学 正会員 白 泰晃

1. はじめに

近年、生活水準の向上、余暇時間の増大に伴い都市部の公園の必要性が高まりつつある。そのため公園の利用形態は様々なものとなっており、その魅力ある空間がどのように形成されているかといった評価は捉えにくいものになっている。また、利用者にとって魅力ある公園空間整備を行うためには、公園空間を形成する様々な要素とその利用実態を明らかにして、魅力の向上を図るための整備の努力が要求されると考えられる。

本研究は、都市公園の利用実態を把握するため公園内の施設利用者に対してアンケート調査を行い、その魅力を分析し把握すると共に、今後の公園計画の基礎資料に資することを目的とするものである。

2. 研究の方法

福岡市のほぼ中央に位置する総合公園である大濠公園を研究対象とした。同公園は、慶長年間、黒田長政が当時博多湾の入り江であったこの地を外濠として利用、後昭和2年ここで開かれた東亜勧業博覧会を機に造園工事を行い、昭和4年県営大濠公園として開園したものである。大濠公園は、総面積398,441㎡そのうち約210,000㎡の池を有した全国有数の水景公園である。

表-1 アンケート実施概要

アンケート実施日	1997年8月24日
天候	快晴
時間帯	6:00～20:00
場所	出入り口付近4ヶ所
対象者	小学上級生以上
調査方法	面接法
アンケート総票数	496票
有効回答票数	486票

本研究の目的である大濠公園の利用行動パターン分析に当たり、まず大濠公園来園者を対象にアンケート調査を実施した。アンケート調査は、個人属性、交通手段、利用頻度、選択理由、満足度等について

合計18項目について面接法により調査を行った。また、アンケート終了時に時間を記入してもらい、時間帯別の分析を行った。

アンケート実施概要を表-1に示す。

3. 個人属性別利用形態に関する分析

アンケート調査に基づき個人属性について分析を行う。まず、公園利用者の性別では女性が57.4%、男性42.6%と女性が多い比率を占めている。時刻別公園利用者の男女構成(図-1)に示すように、早朝は男性の利用者多いが、午前9時からは女性の利用者が男性を上回っている。年代別では、20代が33.0%と他の2倍近い割合になっている。これは行動力ある20代が余暇を過ごすためであると考えられる。

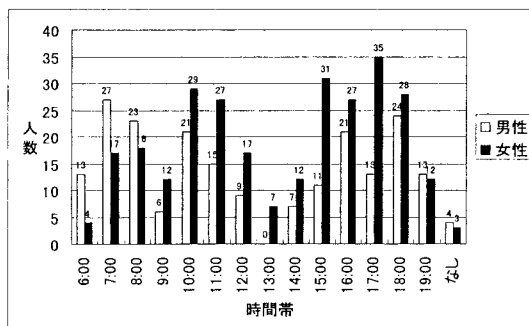


図-1 時刻別公園利用者の男女構成

職業別では会社員の割合が40.9%と最も高い割合を占めている。アンケート実施日が日曜日と重なったためと考えられるが、身近な公園で余暇を過ごす人が多いと考えられる。住所別では、「中央区居住」33.1%に続き「福岡市外」19.5%、「福岡県外」12.4%の割合の順である。「中央区居住」の利用者は、身近な公園として利用し、「福岡市外」、「福岡県外」の利用者は観光地として利用していると考えられる。

4. 公園利用形態に関する分析

利用頻度を見ると、年に数回程度の利用の割合が全体で41.6%と最も高い。これは大濠公園が身近な公園として利用されるより、観光地的な利用が多いと考えられる。年齢別、住所別による差はあまり見られなかったが、男女別利用頻度(図-2)の毎日利用するの項目で見ると、男性6.2%、女性4.9%と男性の利用頻度の高さがわかる。

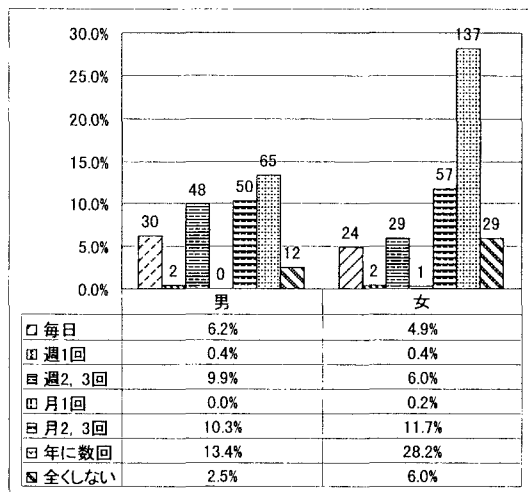


図-2 男女別利用頻度

選択理由として景観に関する項目、利便性に関する項目、公園の美化に関する項目等について18項目例を挙げ、選択理由を把握した。最も多い項目は、「静かで気持ちが落ち着く」(231票/486票)で景観に関する項目に票が集まる傾向が見られた。次に公園の利便性に関する項目、公園の美化に関する項目の順に票が集まった。大濠公園の特色である景観の美しさが公園利用者の来園のきっかけになると考えられる。年代別に見ても同じ傾向が見られたが、20代以下では「仲間と話ができる」の項目に他の年代より多い割合になった。また、30代以上では「安全である」、「自宅の近くにある」などの利便性に関する項目の割合が高い。若年齢層はコミュニケーションを求め、年齢層が高くなるに連れ、利便性で公園を選択すると考えられる。男女別では、男性は女性と比べて「運動しやすい」の項目が6倍近く高い割合を占めている。これは男女の利用目的の違いによるものと考えられる。住所別では「近くに美術館がある」の項目で市内1.2%、市外5.3%、県外5.8%という割合を占めている。遠距離の利用者は公園に隣接する施設と併用するパターンが多いと考えられ

る。

利用目的では、「散歩」が全体の52.1%として最も高い割合である。これは大濠公園の周遊道が散歩に適しているためと考えられる。年代別で見ても、散歩の割合がどの年代でも最も多い割合となっている。30代主婦は子供を遊ばせられるという目的で「遊び場」と答える人が多い。若年齢層と高年齢層では公園利用に関する意識の違いがあると考えられる。男女別で見ると男性は「散歩」に続いて「スポーツ」の割合が高く、女性は「散歩」に続いて「寄り道」の割合が高い。男性は体を動かすため、女性は公園の雰囲気を楽しむために利用するパターンが多いと考えられる。

よく利用する施設は、全体の55.8%を周遊道が占めている。周遊道は、散歩やジョギング、寄り道等に利用されるため最も多い割合を占めていると考えられる。残りの項目に関しては、その利用する施設を目的とした人のみの利用と考えられ、そのため10%を下回る結果になったと考えられる(図-3)。年代別、男女別、住所別で見ても同じ傾向が見られた。

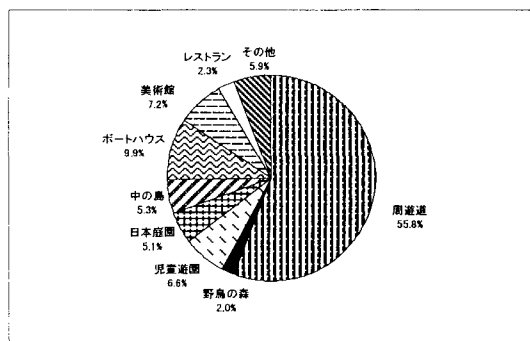


図-3 利用施設

5. おわりに

本研究において、大濠公園利用者は多くの人々に利用され、その利用目的は年齢、性別、住所等に関連して様々なものがあり、その目的によって利用頻度、利用施設等の違いを把握することができた。今後もこのような多目的に利用可能な都市公園の利用実態を把握した上で利用者のニーズにあう公園整備が望まれると考えられる。

<参考文献>

- 1) 島崎敏一、石井忠二郎：大規模公園における公園施設の利用行動分析、第12回土木計画研究・講演集、pp. 427～434、1989。